

遺伝

小酒井不木

青空文庫

「如何どういう動機で私が刑法学者になったかと仰おつしやるんですか」と、四十を越したばかりのK博士は言った。「そうですね、一口にいうと私のこの傷ですよ」

K博士は、頸部の正面左側にある二寸すんばかりの癩はんこん痕を指した。

「癩るい癩きでも手術なすった痕あとですか」と私は何気なくたずねた。

「いいえ、御恥かしい話ですが……手つ取り早くいうならば、無理心中をしかけられた痕なんです」

あまりのことに私は暫しばらく、物も言わずに博士の顔を見つめた。

「なあに、びつくりなさる程のことではないですよ。若い時には種いろいろ々いろいろのことがあるものです。何しろ、好奇心の盛んな時代ですから、時として、その好奇心が禍わざわいを齎もちらします。

私のこの傷も、つまりは私の好奇心の形見なんです。

私が初はつ花はなという吉原の花魁おいらんと近づきになったのも、やはり好奇心のためでした。ところが段々馴染んで行くと、好奇心をとおり越して、一種異状ような状態に陥りました。それは、恋という言葉では言い表すことが出来ません。まあ、意地とでも言いますかね。彼女は「妖婦ようふ」と名づけても見たいような、一見物凄ものすごい感じのする美人でしたから、「こんな

女を征服したなら」という、妙な心を起してしまつたんです。ちょうどその時、彼女は十九歳、私はT大学の文科を出たばかりの二十五歳で、古風にいえば、二人とも厄年だったんです。

始め彼女は、私なんか鼻の先であしらつて居ましたが、運命は不思議なもので、とうとう私に、真剣な恋を感じたらしいです。で、ある晩、彼女は、それまで誰にも打あけなかつたという身の上話をしました。それはまことに悲しい物語でしたが、私はそれをきいて、同情の念を起すよりもむしろ好奇心をそそられてしまつたんです。それが、二人を危険に導く種となつたんですが、あなたのようにお若い方は、やはり私同様の心持になられるだろうと思います。

身の上話といつても、それは極めて簡単なものでした。なんでも彼女は山中の一軒家に年寄つた母親と二人ぎりて暮して来て、十二の時にその母親を失つたそうですが、その母親は臨終りんじゆうのときに苦しい息の中から、世にも恐しい秘密を告げたそうです——わしは実はお前の母ではない。お前の母はわしの娘だから、わしはお前の祖母だばば。お前のお父さんはお前がお母さんの腹に居るときに殺され、お前のお母さんは、お前を生んで百日過ぎに殺されたのだよ——と、こう言つたのだそうです。子供心にも彼女はぎくりとして、両

親は誰に殺されたかときくと、祖母はただ唇を二三度動かしたただけで、誰とも言わず、そのまま息を引き取ったそうです。

その時から彼女は、両親を殺した犯人を捜し出して、復讐しようとしたのだそうですが、自分の生れた所さえ知らず本名さえも知らぬのですから、犯人の知れよう筈はありません。そうになると、自然、世の中のありとあらゆる人が、仇敵かたきのように思われ、殊に祖母と別れてから数年間、世の荒浪にもまれて、散々苦勞をしたので、遂ついにには、世を呪う心が抑えきれぬようになったのだそうです。彼女が自ら選んで苦界へ身を沈めたのは、世の中の男子を手玉にとつて、思う存分もてあそび復讐心を多少なりとも満足せしめ、以もつて両親の霊を慰めるためだったそうです。いや、全く妙な供養法もあつたもんです。

この身の上話をきいた私は、すぐ様、彼女の両親を殺した犯人を捜し出そうと決心しました。彼女がかわいそうだからというよりも、むしろ探偵的興味を感じた結果なんです。然しかし、どんな名探偵でも、こういう事情のもとにある彼女の両親の仇あだを見出すことは困難ですが、私は彼女から伝え聞いた祖母の臨終の言葉に、解決の緒いとぐちを見出し得うるよう感じるので、「お前のお父さんはお前がお母さんの腹に居るときに殺され、お前のお母さんは、お前を生んで百日過ぎに殺されたのだよ」と口の中でつぶやきながら、私は寢食を忘れて、

といつてもよいくらい、ことに百日という言葉を一生涯に幾日も考えたんです。

彼女が姓名もしゅつしやう出生地も知らぬということは、彼女たちが、事情あって、郷里を離れねばならなかったのだろうと考えることが出来ず。又、祖母が死ぬ迄、両親の殺されたことを彼女に告げなかったのにも深い理由があつたにちがいありません。なお又臨終の際に、彼女に問われて、犯人の名を答え得なかつたのも、祖母が、答えることを欲しなかつたと解釈出来ぬことはありません。これ等のことを考え合せた結果、私は、ある恐しい事情を推定し、早速図書館へ行つて、旧刑法をしら調べて見ました。

すると私は、ある条文によつて、私の推定のたしかなことを発見しました。即ち、私は、彼女の父を殺した犯人と彼女の母を殺した犯人が何者であるかを知つたのです。が、それは、彼女に告げることの出来ぬほど恐しい事情だつたのです。けれど、そうなると、却つて、彼女に、あつさり知らせてやりたいという気持がむらむらと起つて来ました。やはりこれも若い時の好奇心なのでしょう。で、いろいろ種々、彼女に知らせる方法を考えましたが、どうも名案が浮びません。とうとう、と兎にも角にも彼女に逢つた上のことにしようという氣になつてしまつたんです。

犯人の推定や図書館通いに、およ凡そ二週間ばかり費し、ある晩ひよっこり彼女をたずねま

したら、彼女は顔色をかえて、「身の上ばなしをしたから、それで厭気いやきがさして来なかったのでしょう」と私を詰なりました。で、私は「お前の両親を殺した犯人を捜して居たんだ」というと、彼女は「嘘だ嘘だいい加減の出鱈目でたらめだ。あなたに捨てられたのなら、私はもう生きて居ない」といつて泣き叫びました。泣いて泣いて、どうにも手がつけられぬので、私はとうとう「その証拠に、犯人が知れたよ」と口を迂すべらしてしまつたんです。

それから彼女が、どんなに、犯人をきかせてくれと、私にせがんだかは御察しが出来ましよう。仕方がないので、私は、私の見つけ出した刑法の条文を、手帳の紙を破つて、鉛筆で書いて、これを読めばわかるといつて投げ出しました。

彼女は、むさぼるようにして、それを読んで居ましたが、何思つたか、その紙片を、くしゃくしゃに丸めて、急ににこにこして、私の機嫌をとりました。私は頗すこぶる呆気あつけない思いをしました。

床へはいつてから、彼女は、「ねえ、あなた、わたしがどんな素性でも、決して見捨てはしないでしょう？」と幾度も幾度も念を押しましたので、私は、彼女が、両親を殺した犯人を察したのだなと思ひました。そう思うと、急に愛着の念が増して来ました。妙なものです。私は、それまで嘗かつてつかつたことのないやさしい言葉をかけて、心から彼女をい

たわつてやりました。すると彼女は安心して眠り、私もまたぐつすり寝込んでしまいました。

幾時間かの後、私は頸にはげしい痛みを感じて、がばと跳ね起きましたが、そのまま再び気が遠くなつて、やつと、気がついて見ると、看護婦に附添われて、白いベッドの上に横よこたわつて居おりました。

あとで、事情をきいて見ると、その夜、彼女は剃刀で私の咽喉のどをきり、然る後自分の頸動脈をきつて自殺を遂げたそうです。その左の手には私が書いて与えた刑法の条文をかたく握つて居たそうですが、最初彼女はそれを読めなかつたので、私が寝ついてから、楼ろうし主に読んでもらつて、はじめて条文の意味を知つたらしいのです。そして、それと同時に、両親を殺した犯人を、ほぼ察したらしく、それがわかると自分の身の上が恐しくなり、到底私に愛されることはむずかしいと思つて無理心中をする気になつたらしいのです」

K博士はここで一息ついた。

「もう大抵たいてい御わかりになつたでしょう。つまり、私はこう推定したんです。彼女の父は、妊娠中の妻即ち彼女の母に殺され彼女の母は彼女を生んでから、絞刑吏に殺されたんだと……彼女のこの悲しい遺伝的運命が私をして、刑法学者たらしめる動機となりました。と

いうのは……」

K博士は傍かたわらの机ひきだしの抽斗ひきだしから皺しわくちやになつた紙片を取り出した。

「これを御覧なさい。これが、彼女の手に握られて居た、恐しい刑法の条文です」

私は、手早く受取つて、消えかかった鉛筆の文字を読んだ。

「死刑ノ宣告ヲ受タル婦女懐胎ナルトキハ其その執行ヲ停とどメ分ふ娩後一百日ヲ経ルニアラザレバ刑ヲ行ズ」

青空文庫情報

底本：「怪奇探偵小説名作選」 小酒井不木集 恋愛曲線」ちくま文庫、筑摩書房

2002（平成14）年2月6日第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1925（大正14）年9月号

入力：川山隆

校正：宮城高志

2010年3月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遺伝

小酒井不木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>